

寄稿論文

『源氏物語』の人間学 覚え書き The Anthropology of *The Tale of Genji*: A Personal Note

太田 直道

OHTA, Naomichi

よにふる人のたたずまひ、春夏秋冬おりおりの空のけしき、草木のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ心ばせを、おのおのことごとに書き分けて、…中略…うつつの人にあひ見るごとく、おしはかるなど、おぼろげの筆の、かけても及ぶさまにあらず。

(本居宣長、『玉の小櫛』二の巻)

1. 『源氏物語』へ

東日本大震災とそれに伴う原発事故は私たちにとって、それまでの生き方を根柢から覆すことを迫るほどの壮絶な出来ごとであった。私たちは近代世界の華やかな表像に幻惑されていたが、そのとき背後に隠されていた真実の裸像が浮かびあがるのを垣間見た。その瞬間、それまでの明るい輝きのうちにあるかと思われていた世界が黒色に暗転するのをたしかに見届けた。科学技術と工業生産に支えられた近代世界にたいする憎悪にも似た危機意識が四周に立ちだかったのである。そして、それと同時に馴れ親しんでいた古い時間が突如引きちぎられ葬られた。私たちはその時あたかも荒れ狂う荒野に放り出され

たかのような身の危険を感じたのではなかったか。

私自身のことを語ろう。西洋哲学史を研究していた私は、人間の精神文化の精髓がそこにあると思い込んで、そのうえにあぐらをかいていたようだ。日本文化に向かう私の魂はそれまで眠っていたが、この根源的振動に揺り動かされてむっくりと起き出したのである。そして旅人が喉の渇きを覚えて一服の水を求めるように、私の魂も清冽な水を求めた。私の魂はくっきりと情感の東風を嗅ぎとり、息苦しさから逃れようとしてそのさわやかさの漂う方に手を伸ばしたのだった。そしてその風が日本の古典文学から吹いてくることを感じとったのであった。

私が震災を契機に『源氏物語』を読みたくなったのは、いまになって思えば、人間の悲哀への「焦燥」、そして人の心の湿潤への渴望に動かされたためであった。無論、現実の場に生きる証しとしては、私は現代の工業社会の危機的な状況に眼をつむるわけにはゆかないし、飽くことなく原発に頼ろうとする極悪政治に立ちほだかりたいと思う。しかし同時に「想念的な私」は人間の原点的なあり方へと回帰することがあたかも魚が水を求めるようにどうしても必要だと思われたのである。しかもそのアプロー

チは『源氏物語』でなければならなかった。この書には人間の生の深層が描かれているという直観が私のなかに潜在していたのである。

『源氏物語』に触れる者はその尽きることのない魅力に圧倒され、主人公たちの一挙手一投足に心を奪われるだろう。四百人を優に越える人間群像が無数のドラマを展開し、その一人ひとりの個性が輪郭線を重ねながら輪の連鎖を形づくってゆく。七十五年におよぶ歳月（正篇と続篇の間に八年の空白がある）は大きなうねりを見せ、時代の変貌を髣髴とさせる。主人公光源氏の遍歴時代から美的成就の時代へ、そして苦悩の晩年へ、さらにその末裔たちの自己分裂的なもつれ合いから末法的苦悩の終末へと進む物語は、まさに空前絶後の人間ドラマの世界である。

なぜ光源氏という理想的主人公が登場するのか。多くの女人たちの失意の溜息と敢然たる決意が伝わってくる。彼女たちは何を縁に生きているのだろうか。蝶の乱舞のように多くの人物によって醸し出されるこの舞台は一体何を伝えようとしているのであろうか。私たちは物語のいたるところで繰り上げられる人間描写の細密画を前に立ち止まる。そしてこの描画を背後から動かしている目に見えない力を感じとる。

私たちは紫式部が設営した巧みな仕掛けと言葉の迷宮にあっけにとられ、何度も鉢巻きを締め直さなければならなくなる。一体彼女は何を伝えようとしているのか、あるいはどこへ私たちを連れてゆこうとしているのか。私たちはこの物語に汲み尽くせない「人間学的」洞察がはめ込まれているを感じる。その一端を取り出し、それがまさにこんにちの人間学的課題へのヒントを与えてくれることを示したい

と思う。

物語をつらぬく「物のあわれ」という名の人間感性のありかたが、一千年を経たいま改めて私たちの心のキーワードになっている。ではなぜ「物のあわれ」なのか。あのとき私たちは誰もが目の前に起きた事態に驚愕するとともに、深い物のあわれの感情が静かに心に流れ込んだことを感じなかったか。それがあわれと気づかれることもなく。

2. あわれの人間学

本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』において、物のあわれとは「げにさもあらむ」（本当に心からそうだと頷かれる）と心が動くことだという。「あはれは、悲哀にはかぎらず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてあはれと思はるるは、みなあはれなり。…中略…うれしきことおもしろき事などには、感ずること深からず、ただかなしき事うきこと、恋しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすじには、感ずることこよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきても、あはれといへるなり」（二の巻）。なかでもあわれは恋において極まるという。「此恋のすぢならでは、人の情の、さまざまとこまかなる有さま、物のあはれのすぐれて深きところの味ひは、あらはしがたき故に、殊に此すぢを、むねと多く物して、恋する人の、さまざまにつけて、なすわざ思ふ心の、とりどりにあはれなる趣を、いともいともこまやかに、かきあらはして、もののあはれをつくして見せたり」（巻の二）。光源氏のさまざまな恋の物語は王朝貴族の色好みを描写するために書かれたのでなく、その懊悩に苦しむ女性たちの心に深い襞が刻まれるそのあわれが卓越しているために描かれた、とする宣長の見識は的をえている。

『源氏物語』はあわれの書である。さまざまな登場人物はあわれの宿命を受容し、それに耐えながら生きる。そしてみずからあわれのなかを生きる者は「物のあわれ」を心に受けとめる。物のあわれの前に人のあわれがある。光源氏ら男たちもあわれを知らないわけではないが（彼らは特権的な力と女性関係を有しているからあまりあわれの資格がない、あわれは本来弱者の世界に訪れるものだ）、あわれを生き、心にあわれを抱く者は圧倒的に女性たちである。この意味で、この物語は女性たちのあわれの生き様を描いた書であり、彼女らの苦悶と感慨と去就を語った書である。「女人往生」がこの書の主題であるとともに、物語の進行を支える通奏低音である。この受苦の性を生きる者たちがそれぞれの末路に向かって、人生の深みへと滑り落ち、いのちを燃焼させるさまを描ききったという点で、この書は真に人間学的である。

重松信弘がこの書において物のあわれがどのように描かれているかを分析した考察は興味深い。彼は恋、さまざまな行為や行事、自然や情景の描写、人の容姿や品位においてあわれが描かれているという。しかしあわれがその真価を発揮し、圧倒的に語り出されるのは恋と男女の葛藤においてである。恋、とくに道ならぬ恋は人をあわれの坩堝に投げ入れると式部は説いているのだという。

彼は、あわれはたんに感情の世界に属するだけではないという。あわれのパトス的なものはロゴス的なもの、思念的なものによって支えられている。そうでなければあわれは一時の感情の揺れにすぎないだろう。重松はこの意味で、あわれを描きながらそのあわれの流れを導くロゴスをも語る書として、思

想的知的要素を貫いた物語として、この書の評価する（重松 1962：19）。彼は物語の全体にわたって「世のはかなさ、憂さ、寂しさ、悲しさの情調」が底流となって流れており、その流れがしだいに進展して「夢の浮橋」巻で極まるという。そしてあわれの情調は一方で和歌的な情調の詠嘆を生み、他方で仏教的な敬仰思慕に吸引されていくという（同：58）。

あわれのロゴスから見るとき、たとえば、六条院の晴れやかな栄華の営みのなかで、女三宮の降家からはじまる紫の上の苦悩の浸食と柏木の異常な心理の増殖が同時に進行してゆくさまは、まことに壮絶なドラマだということがよく分かる。女三宮を中点として一方では静のあわれが六条院の根をしだいに洗い流し、他方では動のあわれが堅固な六条院に激震を見舞わせる、という重層的な構造が浮かび上がってくる。この両面的な応報によって、理想郷であった六条院は瓦解へと傾斜を深めてゆく。この愛情苦のあわれの物語はそのスケールの大きさとあわれの深さによって全編の脊梁を造形している。「若菜上」の巻から「若菜下」の巻への長大な物語の真意はこの脊梁を見逃しては解きえない。栄華と美的情趣のなかで崩壊への因子が秘かに芽を吹き根を張ってゆく。きっかけは女三宮を受け入れるという源氏の浮薄な「色好み」であった。この浮薄さこそが躓きの石だったのである。著者は人間の浮薄が末路への深淵の裂け目を開くことを見抜き、あわれの鉄の必然性にしがたう思いで、金欄の六条院を奈落へと滑り落とさせたのであろう。

3. 物語の人間学

和辻哲郎は『日本精神史研究』において、桐壺巻と帚木巻との間の断絶、複数の作者によって書き継

がれたとする説、さらに「源氏物語」の存在の可能性にまで言及して物議を醸し出した。それだけなら解釈の問題として許されようが、この物語が「なんの連絡も必然性もない荒唐無稽な」心理描写にすぎず、「芸術の象徴的な機能を解せずしてすべてを語ろうとしいたずらに面を塗りつぶす」下作にすぎず、「作者はここに取り扱われた種々の大きい題材を、正当に取り扱う力を持たない人である」というにいたっては、開いた口がふさがらない。「もし現在のままの『源氏物語』を一つの全体として鑑賞せよと言われるならば、自分はこれを傑作と呼ぶに躊躇する」と口走るにいたっては何をか況やである（和辻 1926 : 216ff.）。

和辻が『源氏物語』を理解することができないのは仕方のないことであろう。何しろ作品を、時代の客観的状況から解釈しようとする「社会科学」的な見地と意表をつく彼独特の日本の美意識論をこととするまなざしのもとに、一刀両断することが「精神史」の仕事だと思い込んでいるのだから。そのような理解からすれば、「ものあわれ」も結局は意力の不足の著しい時代における「平和な貴族生活の、眼界の狭小、精神的弛緩、享楽の過度、よき刺激の欠乏等」の産物にすぎないことになる。近代の社会分析主義の眼にとらわれた和辻には「鋭さの欠けた、内気な、率直さのない、優柔なものとして特性づけられる「ものあわれ」が気に入らないのである。物のあわれは、男のますらおを忘れた、女々しいあだ花にすぎない……。

和辻の議論は荒唐無稽で低次元のものだが、この物語を近代小説の観点や歴史社会的分析の視点からとらえようとする傾向は今日でも勢いを保っているように思われる。とりわけ、物語の編纂と構成をめぐる議論は『源氏物語』を分析の対象とすることに

よって、物語から魂を抜いてしまったように思われる。そもそも『源氏物語』は小説ではない。小説には近代社会が張りついている。自己意識的な、そして市民的な近代人の精神空間を前提にすることなしには小説は成り立たないが、この物語の主人公たちはそのような近代的自我とはことなる精神空間に住んでいる。近代小説の視点から『源氏物語』を見ると、和辻のいうようにこの物語は矛盾に満ちたものとなる。むしろ『源氏物語』に視座を据えるとき、近代小説の方が特殊な関心と技法の産物であり、近代的生活の投影された世界観と一体であることを私たちに教えてくれるであろう。

『河海抄』は室町前期の源氏注釈書であるが、「そのをもむき荘子の寓言におなしき物か。詞の妖艶さらに比類なし」と述べ、『荘子』との類縁を指摘している（四辻善成『河海抄』: 186）。意表をつく指摘であるが、大方の近代小説論的解釈よりも的をえていると思う。ジャンルや形式を超えて、「想像力のリアリティー」（仮想世界でありながら現実世界よりもありありと想念されること）を大いに發揮し、しかも想念の世界を縦横無尽に飛翔させたという点で、これら二つの書は比較されるし双璧をなすであろう。

さらに考えるなら、遭遇するさまざまな出来事や人物のあいだで人間の造形と変容がなぜ、どのようになされるのかという問題に立ち向かうことが、この物語の人間学的テーマである。人間存在の根本原理へのヒントがそこに見られるであろう。青年時代の好き男ぶりから晩年の憂愁のなかの出家願望にいたるまでの源氏の変貌はいうに及ばず、「紫上が何故思念的な人間になったのか、また明石上が何故謙虚になったのか」（重松 1980 : 16）というような問

題が物語の進行のなかで読み解かれなければならないのだ。

人間模様、その関係と変貌、そしてその報いがどのようなものかを描ききるにはこれだけのスケールが必要だったのであろう。「物まめやかに、静かなる心の趣」の具体的な姿を描くことが著者のねらいであり、そのためにはさまざまな境遇、出会い、体験が用意されねばならず、その結末が見届けられなければならない。またそのために、物のあわれを知る多くの女性が呼び出され、男とめぐりあい、密通を犯し、あるいは男に翻弄され、またあるいは二人の男の板挟みに合うというさまざまな事件が検証されなければならないのだ。それらの事件の一つ一つにたいして、式部の筆は、あるいは当の女性の心中に立ち入り、あるいは源氏の観察眼に坐り、あるいは著者の立場に立ち、神出鬼没の立ち回りに忙しい（主語は多くの場合省かれるが、絶えず入れ替わり、読者はそれが誰について述べられているのか煩悶しなければならない）。ある人は紫式部をプルーストになぞらえたが（中村 1968 : 37ff.）、心の繊細な動き、あわれのさまを描き分けることにおいて、彼女を越える作家を私は知らない。

4. 構想力の問題

紫式部を駆り立てたものは無数のあわれの世界を織り上げてゆくミュージズの計略であり、主人公たちのたゆたう欲望に生気を与え、予期しない行動に走らせ、そして芭蕉の葉のように寒風に切り裂かれてゆくあわれの終焉に誘うダイモーンのはたらきである。無常というあわれが世界を貫く見えざる糸であり、あわれの無常を描くことがすべてであって、そのために多くの登場人物が交錯しあう膨大な「物語」にならざるをえなかったのである。

こうして『源氏物語』は、王朝時代の物語文学の流れのなかにもありながら、他に例を見ない無二の、空前絶後の壮大な表現世界となった。それは歴史世界のなかから生まれながらそこから飛び出したもう一つの世界、王朝時代のアナザーワールドである。私たちはそれを「紫式部の表象世界」と呼ぼう。この世界は現実には存在しえない世界であるが、現実の世界が歴史の記録のなかにも沈んでゆくのにたいして、そのリアルさの輝きを時とともに増大させる世界、したがって^{あまりにも}超-現実の世界であり、個性がそのまま群像となった物語主人公たちの交感世界である。物語空間は現実空間よりもリアルな、それどころか真実な空間でありえるのだ。この物語は、想像世界の主人公たちがあわれの心を語り、人の懊悩の深みを伝えることによって、現実の私たちに心の呼吸がどのようなものであるかを教えてくれる。それは虚構の世界でありながら、あらゆる仮構を越えてリアルに私たちの心に肉薄する。

著者は目覚めた知性によって物語の筋を企画し、人物を選考して、筆を運んだのではないであろう。むしろ絶対他者であるような彼方の声に引き寄せられて、まるで浮舟が平等院の森に引き込まれたように、物語の森に迷い込んだのである。ミヒヤエル・エンデは、「本を書くというのは、言葉でひとつの現実をつくることです。そして、この言葉たちはある意味で自律性をもっている。言葉は作家が自分でつくるわけじゃない。それはすでにそこにあるものです。……そのなかには、それがわたしのなかにもあることも、わたしがそれをできることも、それまでまったく知らなかったことです」（エンデ 2000 : 22ff.）と語っているが、たしかに物語においては、言葉は作者の作為を超えて自走するのだ。そこには超現実的な必然性がある。その想像力の先駆に

ついてゆくこと、そのことが物語ること、すなわち書くということである。

5. 女人往生について

『源氏物語』の主題は、王朝時代を生きる女性たちのあわれを描くことにあったと思う。望月郁子はそれを「末世における皇統の血の堅持と女人往生」ととらえた（望月 2002）が、至当の理解だと思う。前者は物語の基本的な枠組み、すなわち桐壺帝が光源氏に託した遺志の実現への道を語り、後者は物語の展開を担う女性たちの種々相へと私たちを導く。そして両者は「女のあわれ」において括られる。この書は「女のあわれの物語」である。

『源氏物語』は女人往生を主題としており、登場する女性たちは物語のそれぞれの場面の役を担いつつ、あわれの生を生き、舞台から去ってゆく。彼女たちは自らの生を願うがままに運ぶことができたのだろうか。夕顔はあつけなくいのちを奪われ、藤壺は突如出家をして絶対の秘密を守り通した。六条御息所は失意と恨みのすえに娘に夢を託しつつ不遇の生を終えた後も死霊となり、もっとも幸せな生涯を送るかと思えた紫上は坂を滑り落ちるかのような心の不如意のうちに生を終えた。続く宇治の貴女たちも、大君は結婚拒否のあげく自らを死に導き、浮舟は宇治川に飛び込もうとして横川の僧都に助けられた。描き上げられた多くの女性たちの各人各様の終末への道をたどることは、副次的な関心事ではない。式部自身が強い出家願望を抱いていたが、男性社会の裏側に押しやられ、あまつさえ一夫多妻の煩悶を受け入れざるをえなかったあわれな境遇におかれた女性たちがいかなる最終地点にたどり着いたかという問題は、まさにこの物語の主題だったのだ。

とくに、紫上の死はこの物語をかぎりなく深みの

あるものにし、あわれの楔を読者の心深くに打ち込む最大の出来事であった。彼女の春風に薫るような人生が突如異変を起し揺らぎはじめたのは、女三宮の降嫁が機縁であった。降嫁は朱雀院の意向によるものだから避けがたいと紫上は自らに言い聞かせるが、そのじつ光源氏の心の隙間に差し込んだあいまいな色好みのゆえであったことを、彼女は意識の背後で悟ったのであろう。光源氏との間に生じたこの見えない亀裂は次第に広がり、彼女の身体を蝕んでゆく。女楽の次の夜、彼女は物の怪（御息所の怨霊である。この怨霊が荒れ狂うことがこの物語の一つの動線であるが、それは宮廷世界に苦しんだ女性たちの怨念の権化なのではないだろうか）に襲われ、生死の境をさまようが一命をとりとめた。その後、病の床にある紫上はひたすら出家を願い、仏道に思いを寄せる日々を送るが、源氏に許されないまま消え入るように命を終えた。紫上が倒れたその時から、源氏の栄華の砦である六条院はその輝きを失い、源氏その人も活力を弱め、影法師のようになってゆく。彼の愚かな迷いがすべてを瓦解させたのである。

紫式部は、登場する女性たちの悲哀をさまざまに描き分けた。幸運な生を遂げた若干の女性もいたが、多くの女性には本人の望まない生、あるいは不遇の死が割り当てられた。式部の筆は非常に厳しいが、これらの悲劇なしではこの物語は人間の生の重圧と懊悩を読者に感受させるあわれの書とならなかったであろう。式部は彼女たちのきびしい終末を比類ない水荳で描くことによって、彼女自身の課題でもある、末世（絶望の時代）において女の生きる意味を問いかけたのである。

たしかに、物語の主人公は光源氏であり、女性たちは彼の周りに集う蝶のような存在である。しかし、

式部の眼はこれらの蝶に向けられていたのだ。あわれの種々相を描くためにはこれほど多くの女性を登場させる必要があったのだ。光源氏その人はあまりに理想化されすぎている。彼が終始物語の中心に置かれるのは、さまざまな女性を招き寄せ呼吸させるための「広告塔」のような役目を果たすためである。あるいは光源氏は物語の水面に浮かぶ水鳥の如くであり、軽やかに水面を滑るが、その水面下で慌ただしく水を掻くのは女性たちの懊悩であった。

秋山虔は「女であることのための生きがたさを、源氏物語ほどくりかえしくりかえし痛切な呻きをこめてかたりつづける作品はないであろう」（秋山 1964 : 40）という。紫上は「女ばかり、身をもてなすさまの、ところせう、あはれなるべき物はなし」と嘆いたが、彼女こそはあわれを知る女であり、物語の真の主人公である。彼女の語る言葉はつねに抑制されており、その豊かな感情が高貴な思慮によって琢磨されている。彼女もいささか理想化されているが、そこには同性である紫式部の見はてぬ夢が託されているように思われる。しかし当の紫上は、女は思う事を口に出して言えないので、心にむすぼほれがちになるといって嘆く。そしてその華やかな境遇は流れる砂に埋没してゆく一片の花茎のように、終焉へとつづく悲哀の静寂へと沈んで行く（ちなみに、紫上が光源氏の本妻でありながら終生処女を貫くことによって彼の浮薄の愛を繋ぎ留めたとする望月郁子の解釈（望月 2006 : 63ff.）は意表をついている）。

多くの個性的な女性がさまざまな場面で、源氏の前に現れ、無二の人生行路をたどり、それぞれの末路に向かうさまは、あたかも「女人曼荼羅」を見るようである。そこにはあらゆる哲学書にまさる深い人間洞察がある。さまざまなスタンスに配された彼

女たちは、人間の機微のそれぞれの相を体現しているかのようなのである。女性の心の無限変様を見届けるために、式部はあたかもさまざまな事例研究を試みているかのようなのだ。重松信弘は、『源氏物語』は表面的には男性を主としていながら、実質的には女性を主としており、女性の人間像の方がはるかに多くまた真剣に描かれているといい、「男の愛情の放埒に対する女の痛苦とその反撃ということ」が根本問題であるというが（重松 1961 : 234）、その通りである。また吉本隆明は、「この『物語』がなければ、わたしたちは潜在的な無意識にまで沈みこんだ憂悶や憑依のため、ひとりでに衰弱して死んでしまうような、女性たちの実態を〈知る〉ことはなかったにちがいない」（吉本 1982 : 123）というが、これも慧眼である。

6. 生の模様ということ

若菜下の巻において、病の床に倒れた紫上は、「のたまふやうに、ものはかなき身には、過ぎにたる、よそのおぼえはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみ、うち添ふや、さは、みづからの祈りなりける」（過分の幸いを受けていると人にいわれるかもしれませんが、次々と耐えがたい嘆かわしさがつき纏ってきますのは、それこそが私自身が生きるための祈りだったのです。）と源氏に向かって心のうちを語った。紫上はわが身を襲う苦悶について、それを恨んだり根に持ったりすることをしないで、自らの祈りの種にしている。祈りとは、自らが受けた苦しみを天与のものとして受け入れることによって、その苦悶の和らぎを求める行為である。それでは紫上の生涯を襲った「死に至る苦悶」とは何だったのか。私にはそれは他者^{ひと}の心の底にたいする止みがたい不信だったのではないかと思われる。取り繕われ

た信頼の架け橋が蜃気楼のように実体を持たないことが彼女の生命からも実体を奪っていったのだ。光源氏によって生まれた彼女はこの大切な人を信頼しようとし、全てを赦そうとすればするほど己の心が打ち拉がれていくことを防ぐことができなかった。不信は愛の傍らで生れ、愛を次第に蝕み、ついには愛の元である生命を侵食するにいたる。

他方で、祈りとは「奉納」のことだったのである。この物語において「奉納」ということが、すなわち善きにつけ悪しきにつけ自らがこうむった果報や苦悩を「物」のあわいに返納すること（自己を物の流れのうちに還流させることによって、脱我すること）が語られたのではないか。そのことが因果に寄り添う祈りのあり方ではないのか。この物語が語るあわれは、たんなる風月の面白さをいうのではなく、自己滅却の途上に訪れる心の苦悩が物の側にまで流れ出して、物のうちにあわれが映し出されることをいうにちがいない。そして、奉納の極みとは自らの命を物の流れのなかに還流させることをいうのであろう。この意味で、上の紫上のことばには物語全体の「物のあわれ」が集約されていると思われるのである。

人間描写の多様さときめ細かさとはこの物語の比類のない特質である。とくに女性たちの姿や生き方の繊細な描写はこの物語の舞台の豊かな広がりや深い奥ゆきを醸し出している。彼女たちを描くために、著者は多くの形容詞や名詞を用意した。らうたし

（よわよわしくいとしい）、らうらうじ（心深く洗練されている）、おほどか（ゆったりしてこせこせしない）、おいらか（おっとりしておとなしい）、あえか（きゃしゃでこわれそう）、清らか（匂うように美しい）、重りか（慎重で重々しい）、づしやか

（ずっしりと重々しい）、いはけなし（子どもっぽい）、かどかどし（才気があり気が利いている）、わららか（にこやかで陽気）、けざやか（明敏ではっきりしている）、あて（上品であでやか）などなどの言葉が巧みに使い分けられ、それぞれの女性の彫像を彫り上げてゆく。私たちはあたかも彼女たちの生身の姿に触れているかのような思いに捕われるだろう。

このような個性の持ち主たちがその個性のゆえにさまざまな苦しみを受けるさまはまことにあわれであり、そこにこの物語におけるあわれの核心部がある。式部が「物のあわれ」を作品の主旋律に据えたのだとすれば、その基底には「人のあわれ」という低音部が鳴り響いている。苦悩を身に受け、その苦悩に深い思慮でもって立ち向かおうとした紫上や明石上のような女性たちはあわれを誰よりも深く知っている。重松信弘によれば、「まめやかな心と、あわれを知る心と、賢い心との三者がこの物語における人間の本義の要綱となる」（重松 1960 : 41）。

紫式部が描く主人公たちはこんにちの私たちとも共通の心性をもった「普遍人」であり、私たちもまた彼らが感じとったあわれを共有することができるが、しかしそれにもかかわらず彼らは彼女が周到に彫琢した「大宮人」であり、いわば彼女自身の分身たちである。彼らはいわばあわれの情趣の原型を体現したのだ。そしてそのことによって、その後の日本人の心性にあわれの心を繁殖させたのだ。

7. 現代文明と『源氏物語』

『源氏物語』はフェミニズムの問題の深層を描きあげた人類最初の偉業の書である。この書は女性たちが受苦の位置におかれた存在であることを訴える。苦悩が奈落への誘いであるとともに生きる覚悟を与

える機縁でもあること、この世界の煉獄のなかには隠された花園があること、そして生きたことの証しとなる「女人往生」を遂げることが女性たちの最終課題であることを、この書は語る。

秋山虔は主人公たちの苦悶について、物語の著者が「この完満の世界に織りこめられる、あまたの人間の苦悩の姿に的確な目を向けている」ということを認めながら、その描出が「きわめて嘆息的な主情性」に終始しているのは、「所与の世界秩序の中に編みこまれ、その埒外に自己の生を脱去せしめることができぬ決定的な運命に対する無力」という時代背景にその原因があると即断している（秋山 1962: 122）。違うのである。彼女たちは無力に生きているのではない。あえていえば、その苦悩は抵抗の苦悩なのである。このような、歴史社会的状況から主人公たちを規定しようとする傾向（たとえば、受領層の女性が貴族社会の中で生きるうえで直面する人間的社会的課題を扱ったものだとする理解が一般的である）がこんにち多く見られる。この物語を、社会の歴史的構造にがんじがらめにされ、伝統化された規矩に身を委ねる術に熟達した人々を描いたものだとする、式部の世界を矮小化する理解が一般的なのである。しかし、彼女がそのような社会的制約（撰関政治の社会状況）に呻吟する群像を描いたのであれば、この物語はむしろ駄作であり、『大鏡』でも読んだ方がましであろう。

およそ社会科学的分析や近代的価値基準からこの物語を論評しようとする態度は読む者の眼を近視眼にする。『源氏物語』に主体性や自由や自己意識というような語を持ち込む不見識が横行している。式部はそれらの言葉も考え方も知るはずもない。この物語を「合理的根拠がなく超論理的なもの」として貶めようとする裁断にいたっては開いた口がふさが

らない。

なぜいま「物のあわれ」に注目すべきなのか。歴史が赤色巨星のように膨張し実体を失い、科学技術がもはや誰も止めることができない勢いで沸点に達しようとしている現代において、私たちは近代的人間像がもはや未来世界を担うことのできる資格を保持していると考えることができなくなっている。人間性の根本的出直しが必要だと心の底でうすうす感じながらその方途を見出すことができないという焦燥が心を覆いつくしている。危機があまりにも大きく差し迫っているので凝視することができないまま、精神の寝ぼけに身をまかせるという体たらくから抜け出すことができない。故郷を追われ、行く当てもない精神的難民状態のなかで、人々の心の不如意だけが広がり漂う。

そのような時代には根に還ることが何より必要である。人間精神にとって根は過去の遺産である。過去の精神的遺産を知ることそのことは、こんにちの困難を乗り越える方策を教えるのではない。そうではなく、それは人間の根源的困難という根本事態に立ち向かった叡智を顧みるという行為なのである。私たちは身を反転させ、来た道を振り返らなければ前にある問題を正しく見ることができない。そしていま私たちが振り返るべき世界として、日本文化を培ってきた美的な創造世界がいつその輝きを増したのだと思う。そのなかで「物のあわれ」の文化は断然注目されるだろう。精神的なものへの関心、合理や計量を超えた心情的なものへの回帰がなければ、現代の狂気を見据えるまなざしも生まれまいだろう。そして、私たちはいま美的宗教的意識の蘇生と胎動がすでに私たちの生存意識の基底で頭をもたげているを感じている。

こんにちは、人の心における受苦の心性を見つめなおすことが必要だと思う。物のあわれを知ることが人間性の復権のために不可欠である。物のあわれを知る心を知り、それにしたがった生き方を模索すること、ここに私たちが『源氏物語』の叢林に分け入ろうとする最大の意味があり、蘇生への見通しを持つための手がかりがある。

参考文献

- 秋山虔（1964）『源氏物語の世界』，東京大学出版会
 重松信弘（1980）『源氏物語の人間研究』，風間書房
 重松信弘（1961）『源氏物語の主題と構造』，風間書房
 重松信弘（1962）『源氏物語の構想と鑑賞』，風間書房
 清水好子（1973）『紫式部』，岩波新書
 玉上琢弥編（1968）『紫明抄・河海抄』，角川書店
 中村真一郎（1968）『源氏物語の世界』，新潮選書
 中村真一郎（1985）『色好みの構造』，岩波新書
 原岡文子（2003）『源氏物語の人物と表現』，翰林書房
 ミヒャエル・エンデ（2000）『ものがたりの余白』，田村都志夫編訳，岩波書店
 望月郁子（2002）『源氏物語は読めているのか』，笠間書院
 望月郁子（2006）『源氏物語は読めているのか【続】紫上考』，笠間書院
 本居宣長（1796）『源氏物語玉の小櫛』，『本居宣長全集第4巻』，筑摩書房
 吉本隆明（1992）『源氏物語論』，ちくま学芸文庫
 四辻善成『河海抄』，玉上琢弥編『紫明抄河海抄』，角川書店（1968）
 和辻哲郎（1926）『日本精神史研究』，岩波文庫

（1992）

『源氏物語』からの引用は、山岸徳平校注『源氏物語』（日本古典文学大系）、岩波書店に拠った。

[おおた なおみち／宮城教育大学名誉教授／哲学]